

インドの性愛に対する思想の変遷

寺田麻美

はじめに

インドにはリング（男根）崇拝や性愛論書『カーマ・スートラ』が存在している。そのような文献や彫像を見ると、性が非常に開放的であるように感じられる。一方、実際の人々の生活を見てみると、禁欲的であり性に関して非常に保守的である。

本論文では、宗教や文献・彫像に見られる性と、実際の人々の性風俗との関連を明らかにしたい。

第一章 ヒンドゥー教の性に対する考え方

ヒンドゥー教の重要な神、シヴァとヴィシュヌには、それぞれリング崇拝とバクティという信仰形態がある。ヒンドゥー教の代表的な事例としてその二つを以下に挙げる。

世界中いたるところで男根崇拝の例はあり、日本にも道祖神としての男根崇拝がある。その多くは豊穡を願った地域的・民族的な信仰である。しかし、インドのリング崇拝は単なる多産豊穡の象徴ではない。リングとはシヴァの男根であり、それは世界・宇宙の柱としての役割を持っている。リングがシヴァの一部という考えではなく、シヴァ＝リングであり、人々がリングを礼拝するときは、シヴァを礼拝するのと同じなのである。一見、卑猥に見えるリングに牛乳を注ぐ行為は、シヴァの性行為、すなわち世界創造に関与するという礼拝であり、そこにセクシュアリティ的な意味は含まれていないのである。

また、インドの重要な信仰の一つに、「神を熱烈に信じ愛すること」を意味するバクティがある。ヴィシュヌの化身であるクリシュナを恋人のように慕う信者が多く、ムガル王朝期には、クリシュナとその恋人ラーダーの官能的な絵画も多数見受けられた。その熱烈な信仰は当時の詩や絵に表れているが、実際の性行動に信者が走ることはない。むしろ、俗世の愛から脱し精神的な愛への昇華を目的とした信仰だと言える。

このように、生殖器崇拝や恋人に対するような熱烈な愛といった、一見すると俗物的なモチーフを宗教として信仰することで、聖別化しているのである。

第二章 禁欲の信仰と快楽の信仰

本当に宗教行為の中で性行為は行われなかったかという点、例がないわけではない。それが以下に挙げるタントリズムである。

原始仏教は完全に性を信仰の中から除外した。仏教の教えが性欲に代表される生命エネルギーを抑制して、寂靜たる解脱を目指す「寂靜の道」を目指していたからである。しかし後世、生命エネルギーを活性化させて、さらにそのエネルギーを浄化することで解脱に至ろうとする「増進の道」に転換する動きを見せた。それが妙齡の女性をパートナーとして、性的ヨーガを実践するタントリズムであった。

ヒンドゥー教では禁欲思想として苦行が挙げられる。苦行は仏教の「寂静の道」と同様にエネルギーを抑制し、蓄えることであった。一方、シヴァとその妻パールヴァティーの交合でもって、生命エネルギーの増進を目指す信仰がヒンドゥータントリズムである。

仏教タントリズムでは実際に性行為を行い、ヒンドゥータントリズムでは擬似的な交合儀礼を行う。どちらも、性行為を宗教の中に持ち込み、浄化し、その生命エネルギーを得ようとしたのである。

第三章 民衆文化と性愛の関わり

宗教では、性的なモチーフを扱いながら、実際は聖と俗を完全に切り離そうと試みていた。一方で人々は性愛をどのように考えていたかを文学・美術によって考察する。

インドには一般的に三つの人生目標がある。それはダルマ（法）、アルタ（実利）、そしてカーマ（性愛）である。カーマの指南書である性愛論書『カーマ・スートラ』では、全七部にわたって、男女の生活の規範から性交渉の方法、結婚に関することから果ては薬や呪術の知識まで書かれている。単なるポルノグラフィーとしては、あまりにも詳細かつ学術的な『カーマ・スートラ』が編纂された背景には、古代インドの都市において性愛が非常に重視されていた事実があったことが推察できる。

『カーマ・スートラ』の教えは、文学や美術の中に生き続ける。インド古代の偉大な詩人カリーダーサも、『カーマ・スートラ』の技法を用いて、シヴァとパールヴァティーの情事の様子を書き、大きな波紋を呼んだ。その後も、性愛・恋愛的文法は中世の宮廷文学にも影響を与えている。美術の面では、古代から近世に至るまで作成され続けている男女交合像のミトナ像を挙げる。作成の動機が未だに不明なミトナ像であるが、さまざまな体位で交わる男女の像は、古代インドの性を謳歌した時代を表現したようにも、考えられている。

中世や近世になっても、文学や美術に性愛的な表現は見る事が出来た。しかし、それが実際の当時の人々の生活を表している可能性は低い。むしろ、社会的・宗教的な規範が強くなってしまったからこそ、古代への理想という形で、描かれるケースも少なくないようにも考えられる。

第四章 近代化とグローバリズムの中のインド性愛

古代インドから中世・近世の時代までの人々の、詳細な性風俗を記録した書物は発見されていないため定かではないが、女性の社会的地位の変化と性愛は密接に関わっていると推測している。古代インドでは母系制社会であり、女性もある程度の自由を有していた。その後、社会・宗教がより確立されていく中で、女性の地位も少しずつ下がり、差別化が進んだのではないだろうか。そして、近代インドが大きく変革した植民地時代、もう一度女性の地位が見直される。西洋の文化流入に対抗する一つ的手段としての女性教育である。女性を縛っていた悪習を廃絶する一方で、インドの伝統を守る役割も女性に与えられ、より規範的で貞淑な女性像が確立した。

しかし、現在は状況がさらに変わり、経済自由化から、インドに台頭してきた中間層の存在は、新たな性愛の理想を抱いている。女性の自立はその大きな要因の一つとなっている。80年代ではまだ女性が夜遅くに働いているというだけでスキャンダルであったが、現在、IT企業に勤務する女性のほとんどは、一人暮らしで昼夜を問わず働いている。この生活の変化が従来の結婚観の変化を及ぼしている。以前は親の決めた相手と結婚式当日に顔を合わせるということも少なくなかったが、今、中間層の女性のほとんどは結婚以前にある程度の付き合いをした後で、家族の了承を得る形を好む。

インド大手雑誌『India Today』では、2003年から毎年、中間層を対象とした性調査を行っている。このことから性に対する現代のインド人の興味の高さが窺える。誌上での詳細な調査は、『カーマ・ストラ』の分類学にも相当するもので、実際、記事中には『カーマ・ストラ』をポルノではなく、性愛論の重要な書物だという記述も存在している。しかし、そのアンケート内容を見てみると未だに保守的な意見が圧倒的に多く、婚前交渉のタブーなどは厳然と存在している。

また、都市と農村では意見の開きも大きい。農村では未だに幼児婚の慣習が残り、女性の性教育も進んでいない。急速に発展を続けるインドだが、人々の意識の違いも急速に広がりつつあるのではないか。

おわりに

性的に見えた宗教の中に禁欲の思想があった。禁欲的な建前の中に性愛の謳歌があった。その両方の側面から見てみると、リング崇拝などの性愛的に見えるヒンドゥー教の本質は性を俗なるものから聖なるものへと昇華したものであり、宗教的生活を規範とするインドの人々が禁欲的であるのは当然とも言える。しかし、古代のインドが性愛を肯定していたことが、人々の文化的側面に大きく影響したこともまた事実である。

西欧文明によるインドの発展が正しいものであるかはわからない。しかし、近代化により人々がより精神的に自立し、自由を得ることが出来るのであれば、古代のような性愛や自由恋愛の実現の可能性がないとは言えないだろう。女性問題や格差をより少なくしていくことで、多様なインド社会で多様な性愛の形が、より自由に行えるのではないかと、筆者は考える。